



新潟県支部報

マイ スコープ

探鳥と撮影に生甲斐

中魚沼郡川西町 黒島 善助

定年後のボケ防止と健康維持を兼ねた趣味生活と云うことで、野鳥の会に仲間入りして5年目、ボケ防止が生甲斐になり毎日充実した日を送ることができつくづく喜んでいる今日この頃である。探鳥は定年2年前から、定年後は探鳥と共に郷土に生息する野鳥写真を撮りたい。こんな夢の様な計画をたてたが、2年ぐらいでは野鳥を覚えることができず、定年後更に2年は近くの探鳥会は全出席。その他の日は毎日の様に1人で探鳥、参考書にビデオにテープと鳥三昧の日を送り、古女房からは「鳥キチ」扱いされながらも、ようやく野鳥がどんな所に生息するかおぼろげにわかるようになった。本年からはいよいよ第2の目的に入るぞと、カメラと双眼鏡ぶらさげて向かうが、こと志と違い容易でないことがわかった。撮影できる場所に鳥がきてくれない。たまたまきても技術が1年生では露出をはじめどうにもならない。とにかく経験しか



クロツグミ

ないとデータを記録しながらの勉強撮影をしているうちに、これまでに約30種を撮るには撮ったが、中には私にしかわからない様な鳥もあり、鳥達に大変すまないと思っている。写真のノジコ、クロツグミは4月下旬、私のフィールドの1つである国道252号線の柏崎市へ向う途中の一部が旧道となった所です。ここは通りも少なく、待っていればウグイス、ノジコ、クロツグミ等々が電線にとまり観察するには、ばかよい場所です。この日はクロツグミの採餌写真が目的でしたが、なかなか田におりずしばらくしているうちに、電線にきたのをあわてて2カットパチリ、帰宅途中の道路際でノジコを6カットパチリ。一朝に2種これはもう早起きは三文の得としか言い様がありません。最近ブッポウソウとサギの群れを撮り1人悦に入っております。鳥達と共存しながらの撮影これが私の生甲斐です。



ノジコ

朝日池・鵜ノ池の水鳥類（概要報告）

山本 明*・後澤 正知・古川 弘・中川 直剛・末崎 朗（*執筆者）

はじめに

高田平野の北部に位置する朝日池には、秋から冬にかけて多くの水鳥類やワシタカ類が渡来し、近年鳥類愛好者や観察者が多く訪れて、この池が鳥類の重要渡来地としての認識が広がって来ている。加えて'91年には隣接する鵜ノ池などと共に、県営都市公園化の構想が発表された。こうした状況の中で、この両池における鳥類の全般的な調査はまだなされていないことから、当支部はその基礎的資料を得るために、'92年4月より調査を開始した。

調査は池の水鳥類と周辺の樹木・あし原の鳥類を対象に行ったが、今回は水鳥類についての調査結果を報告する。十分とは言えないが、ひとまずこれまでの調査を概略的に報告し、不十分な面は今後更に調査を続けて補ってゆくつもりである。

1. 調査地

朝日池・鵜ノ池は、共に自然の地形を利用して、湧き水をせき止めて造られたもので、図1に示すように朝日池はアメーバ状、鵜ノ池は釣針状の複雑な形をしている。共に水深は浅く、水位の変動はあるが、平均水深は1m足らずである。水面の面積は朝日池が45ha、鵜ノ池は22haである。

朝日池の南側と東側から北側の一部にかけて、道路を隔てて水田や畑地に面し、北側の大部分はゴルフ場に面しているが、池の縁に沿って若干の樹木が列状に残されている。西側はスギと広葉樹の樹林に囲まれている。南側と東側から北側に続く部分に近年護岸壁が造られ、その後北側の一部も護岸堤工事が行

われた。

一方、鵜ノ池は南側の大部分と東側の一部は水田に面し、西端には高速道路が走り、北側一帯と南側の西端付近や東側の一部は広葉樹やスギの樹林となっている。釣針状の内部に当たる部分はかつては松と広葉樹のよく茂った樹林であったが、松枯れの発生や'92年に町営の公園化が進められて現在は疎林状になっている。



図1. 朝日池・鵜ノ池の位置と地形

(国土地理院1/25,000)

両池とも富栄養湖で、池の縁や端の方にヨシ・マコモ・ガマ・ウキヤガラその他の抽水植物が成育している所があり、特に鵜の池では発達し、あし原となっている部分かなりの面積に達する。また両池ともハスの生育している所があるが、朝日池ではこのところ少なくなっている。朝日池にはその他ヒシ・ヒ

ツジグサ・ジュンサイなどの浮葉植物も見られ、その実や茎葉はガンカモ類の餌となっている。

なお、朝日池は県設の鳥獣保護区になっているが、鶺鴒池はそれに含まれていない。また両池とも人為的な給餌は行われていない。

2. 調査方法

調査は地元会員により、'92年4月より翌年3月まで毎月2回（通常第1と第3日曜日）行い、他に個人で都合のつく日に任意に行うことにした。調査時間は午前中とし、春から夏にかけては早朝にも行った。

すでに述べたように、両池とも複雑な形をしているため、1点から湖面のすべてを見渡せる所がない。朝日池では南岸の突き出た所（中央より西寄り）が比較的に見通せるが、図7の(イ)の入江や、(ウ)・(エ)の岬状に出ている部分の北側などは隠れて良く見えない。近くに行ってみようとしても、水鳥類は警戒してすぐ飛び立ってしまうほか、対岸などからは樹木によって見通しが遮られる。結局南岸の突き出た所を主な観察地点とし、(A)・(B)・(D)の見えない所は見える所まで移動して観察した。特に(B)の部分は西側のゴルフ場の方からも観察した。

鶺鴒池ではあし原などによって湖面が区分された状態になっているので、観察場所を移動して行うことができた。従って数ヶ所に観察地点をおいて調査した。

両池ともヨシ・マコモのあし原やハスの群生の中に入っている鳥は把握できない。こうした地形や植生状況のため、この両池の水鳥類を正確にカウントすることは極めて困難である。従って調査は可能な範囲で行って、その結果を相対的にみてゆくしかない。

調査では双眼鏡・望遠鏡およびカウンターなどを用い、鳥類とその個体数を数えて記録した。カウントでは個体数の多さにしたがっ

て1羽・10羽・100羽の各単位で行った。なお、朝日池では湖面利用の分布をみるために図7に示すように区分して、そこに入っている個体数の概数も数えた。

3. 調査結果

(1)水 鳥

調査期間中に観察された水鳥類を表1に示す。8科48種が確認されたが、これらの中には一時的に渡りや移動の際に立ち寄るものも少なくない。この他に過去に観察された珍鳥などもあるが、省略した。

(2)種数と全個体数の季節的な変動

朝日池・鶺鴒池は大多数が冬鳥のガンカモ類の渡来する所なので、これらの鳥の渡来の始まる9月から調査結果をまとめて図示した。

図2および図3に両池における水鳥の種数とカウントした全個体数を示す。しかし、既に述べたように観察できない所もあるので、カウント洩れを考慮すれば実際の個体数はもっと多いところであろう。各月を前半と後半に分け、2回以上調査した時は個体数の多い方を採用している。ここに掲げた種数は、カウントした調査日に観察された種を合計した（調査日以外の観察種は含まれていない）。

年間を通して両池ともガンカモ類以外の水鳥も入っているが、その数においては圧倒的にガンカモ類が多い。特に朝日池ではその傾向が強い。朝日池の種数は12月以降5種以内で増減がみられるが、日によって入っている水鳥に変動があるためであろう。全個体数でも、11月後半に減少しており、12月後半には更に一段と減少している。11月後半の減少は、2回の調査日がいずれも晴れていてガンカモ類が池から出ていたからである。また、12月後半の減少は、調査した日が湖面の90%以上が凍結していて、ガンカモ類の入る水面が不足していたためである。

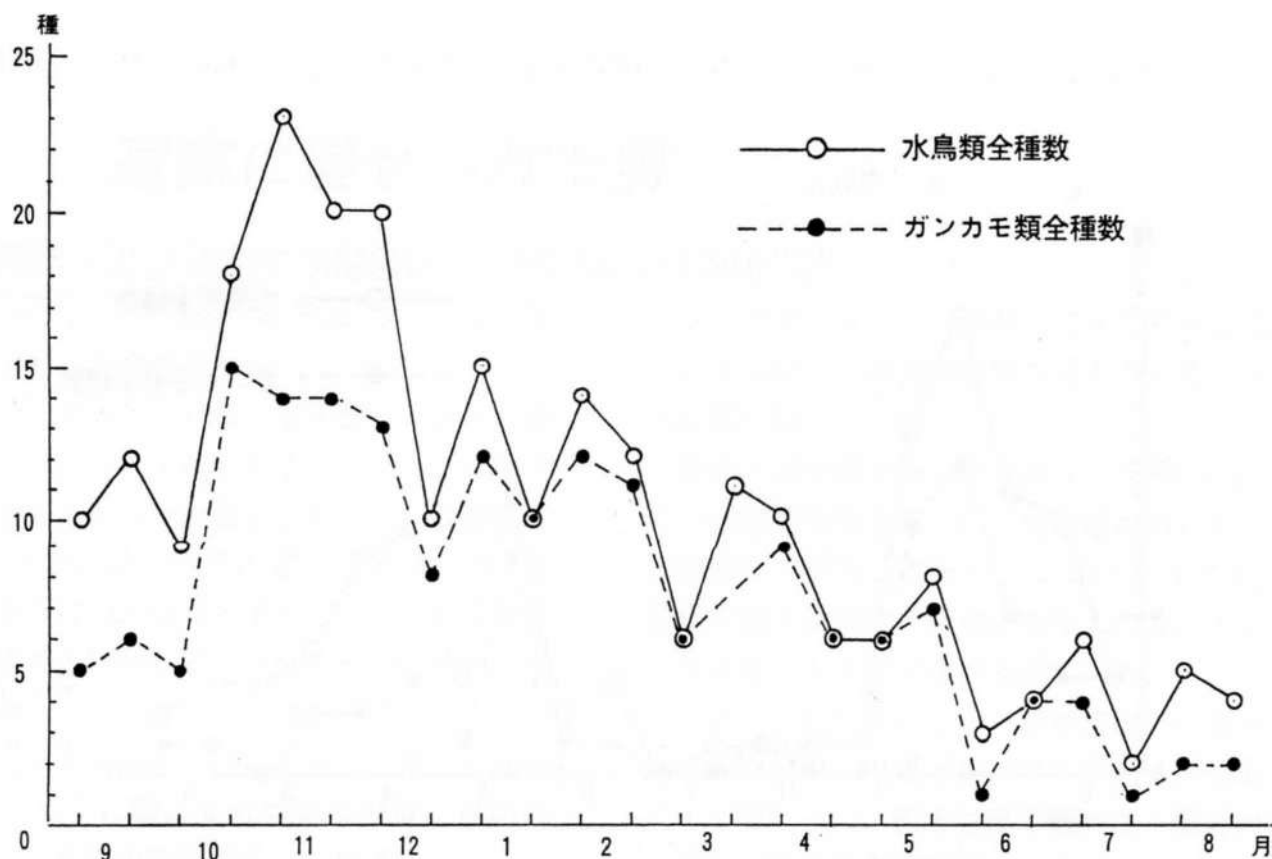
表1. 朝日池・鶴ノ池で調査期間中に観察された水鳥類

(調査日以外も含む) A: 朝日池 U: 鶴ノ池

科 名	種 名	A	U	科 名	種 名	A	U
カイツブリ科	カイツブリ	○	○	ガンカモ 科	ホシハジロ	○	○
	ハジロカイツブリ	○	0		キンクロハジロ	○	○
	カンムリカイツブリ	○	○		スズガモ	○	0
ウ 科	カワウ	○			ミコアイサ	○	○
	ウミウ	○			カワアイサ	○	
サ ギ 科	ササゴイ		○	クイナ 科	バン		○
	アマサギ	○	0		オオバン	○	○
	ダイサギ	○	○	チドリ 科	コチドリ	○	○
	チュウサギ	○	○		イカルチドリ	○	○
	コサギ	○	○		タゲリ	○	
	アオサギ	○	○	シ ギ 科	タカブシギ		○
ガンカモ 科	マガン	○	○		ジシギの一種		○
	ヒシクイ	○	0	カモメ 科	カモメ	○	
	オオハクチョウ	○	○		オオセグロカモメ	○	
	コハクチョウ	○	0		コアジサシ	○	
	オシドリ	○	○	調査日以外の確認種			
	マガモ	○	○	ガンカモ 科	コクガン	0	
	カルガモ	○	○	シ ギ 科	キアシシギ		0
	コガモ	○	○		ソリハシシギ	0	
	トモエガモ	○		クイナ 科	ヒクイナ		0
	ヨシガモ	○	○	カモメ 科	アジサシ	0	0
	オカヨシガモ	○	○	[注] 1. 調査日は全体をカウントして調査した日。 2. 0 は調査日以外に出現したもの。 3. シギ・チドリ類で池の周辺にいて、池の中に入らなかったものは除いた。			
	ヒドリガモ	○	○				
	アメリカヒドリ	○					
	オナガガモ	○	○				
	シマアジ	○	0				
	ホオジロガモ	○					
	ハシビロガモ	○	○				

一方、鶴ノ池は朝日池に比べて種数も個体数も少ない。これは池の中に育成するヨシやハスなど大型抽水植物の繁茂で、観察の妨げによるカウントもれを考慮しても、なお少ない。特に、11月15日の狩猟解禁のあと極端

に減少しているのは、鶴ノ池が猟区になっているからである。12月後半に300羽程になっているのは、調査日の朝たまたまマガンの群が入っていたためである。2月15日の猟期終了とともに、また少し回復してくる。



(各月前半と後半の数を示す)

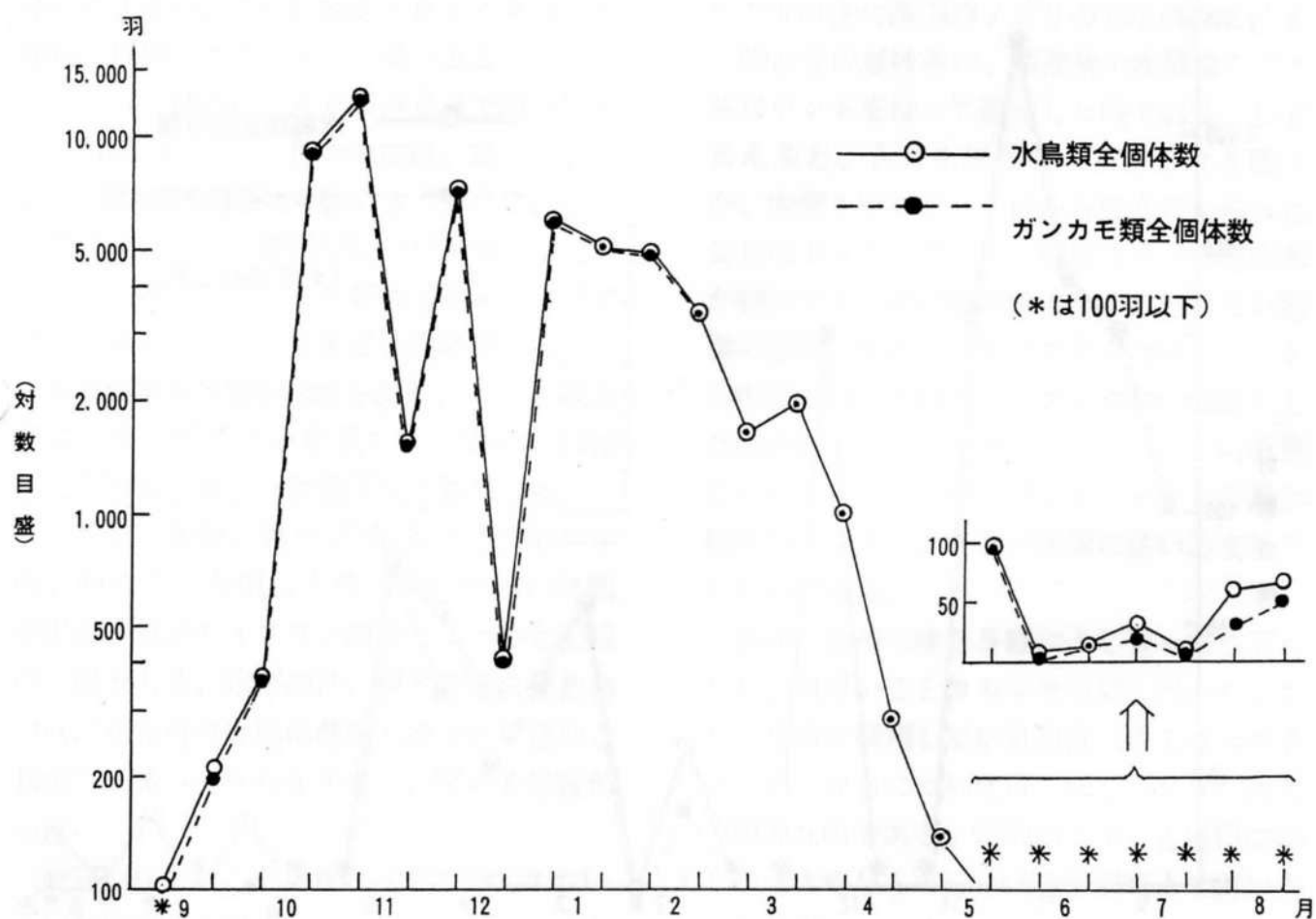


図2. 朝日池における水鳥類の種数および個体数の季節的変動 (1992~1993)

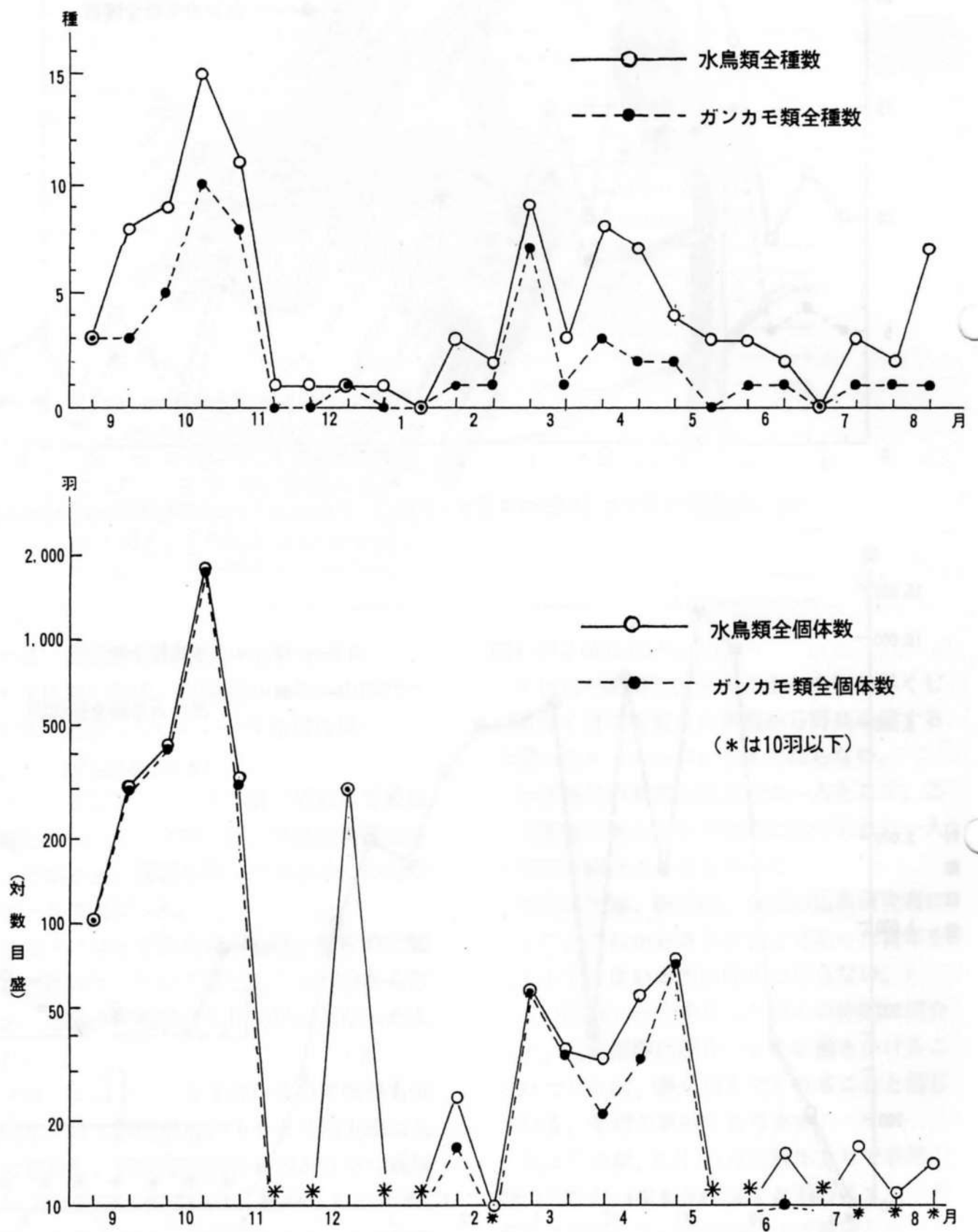


図3. 朝日池における水鳥類の種数および個体数の季節的変動 (1992~1993)

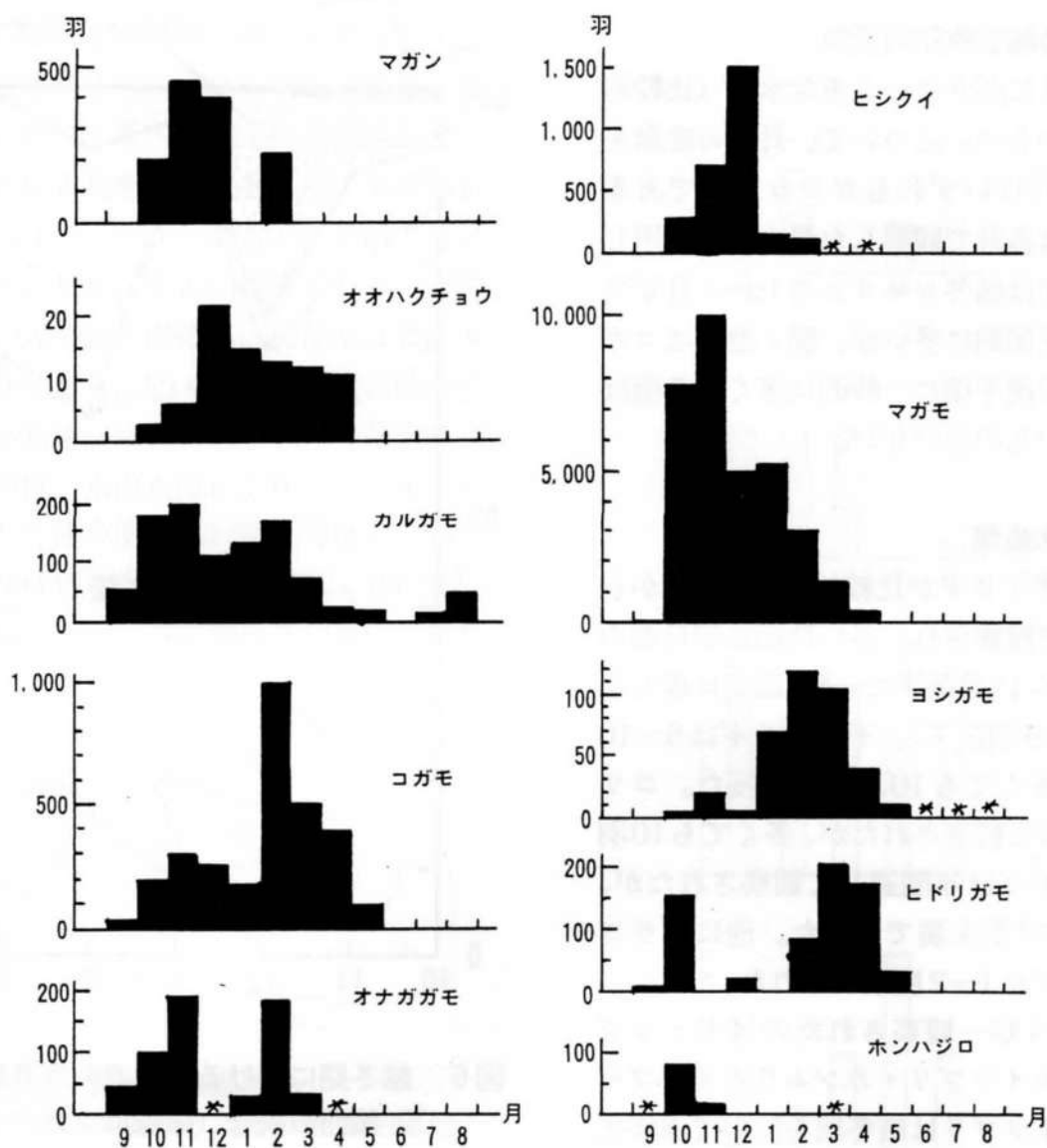


図4. 朝日池における主な水鳥の季節変動 (*は少数の個体)

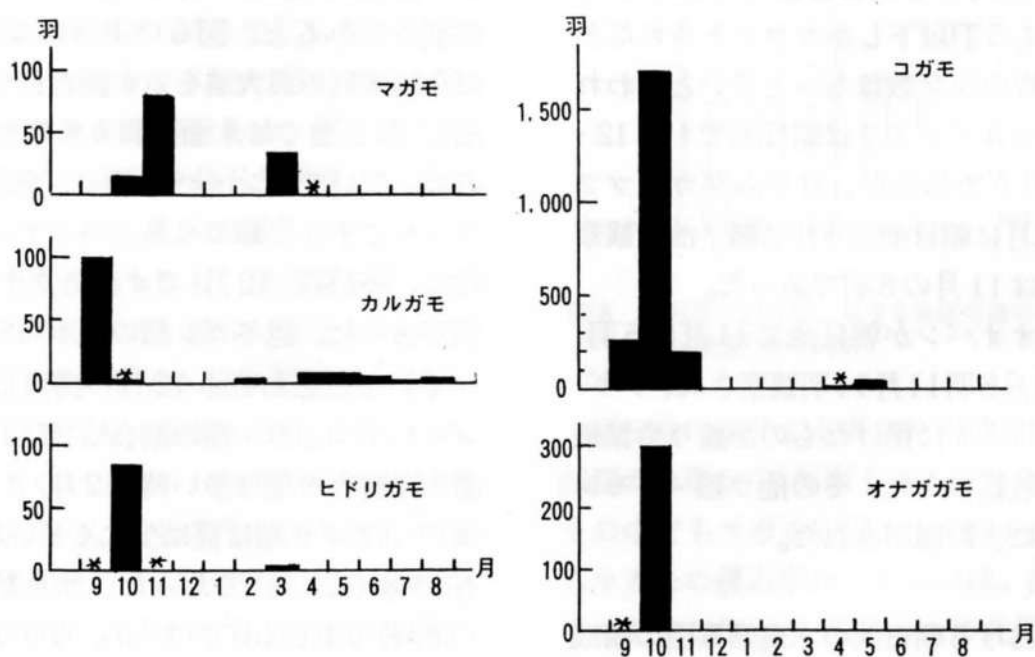


図5. 鵜ノ池における主な水鳥の季節変動 (*は少数の個体)

(3) 主な水鳥の種別季節的変動

図4と図5に両池にいる主な水鳥（比較的個体数の多いもの）について、月別の変動を示す。これらはいずれもガンカモ類であるが、個体数は各月で観察した最大値を採用した。朝日池では越冬シーズンの10～1月まではマガモが圧倒的に多いが、鶴ノ池ではコガモが渡来期の後半頃に一時的に多くなる他は突出して多いものはいない。

(4) その他の水鳥類

①サギ類…ダイサギが比較的多く、9月から翌年2月まで観察され、多い時期は朝日池の10月後半から11月前半で一時122羽に達した（他の時期は5羽以下）。チュウサギは8～10月に現れ、多くても10羽以下だった。コサギは8～11月に観察されたが、多くても10羽前後、アオサギは年間通して観察されたが、数は各池で10羽未満であった。他にササゴイ・アマサギが1～2度観察された。

②カイツブリ類…観察されたのはカイツブリ・ハジロカイツブリ・カンムリカイツブリの3種。カイツブリは厳冬期を除いて周年生息していると思われるが、ヨシ、マコモやハスなどの中に入っていると観察されないのので、両池とも5羽以下しかカウントされなかったが、実際の生息数はもっと多いと思われる。ハジロカイツブリは朝日池で11・12・2月に3羽以下であるが、カンムリカイツブリは11・12月に朝日池と3月に鶴ノ池で観察され、最高は11月の8羽であった。

③その他…オオバンが朝日池で11月に5羽、鶴ノ池で10月6羽11月14羽観察され、シギ・チドリ類では表1に掲げたものが渡りや繁殖の時期に少数観察され、その他ウ類・カモ類が朝日池に少数観察された。

(5) 越冬期における朝日池の水鳥類集団の構成とその割合

朝日池に越冬する水鳥類を、個体数の多さ

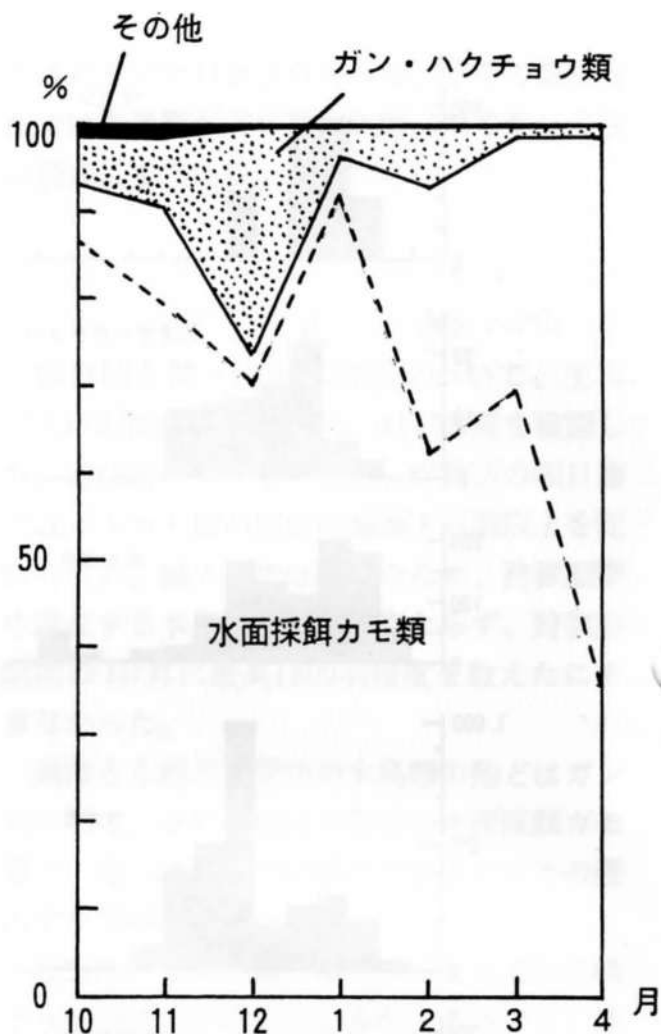


図6. 越冬期における朝日池の水鳥類

集団の割合（破線はマガモの割合）

から、ガン・ハクチョウ類、水面採餌カモ類、その他（残り全部）に分けて、越冬期の個体数の割合をみると、図6のようになった（各月の全個体数の最大値を示す調査日をもとに算出）。朝日池では水面採餌カモ類が大部分を占め、次いでガン・ハクチョウ類となる。ガン・ハクチョウ類のうち、ハクチョウ類は少なく、多い時（12月）でオオハクチョウの22羽であった。越冬ガン類の大半（1900羽）が入っていたと思われる12月の調査日でも、ガン・ハクチョウ・類の割合は27%であった。潜水採餌カモ類は多い時（12月）でも90羽（1%）で、アイサ類は更に少なく多い時（1月）でも11羽（0.2%）であった。サギ類は多い時（11月）でも132羽で（1%）、カイツブリ類は多い時（11月）でも15羽で（0.1%）であった。

(6)朝日池における水鳥類の湖内利用分布

朝日池で水鳥はどのような場所に多くいるかを見るために、湖内を図7のように区分してその中にいる鳥をカウントした。全個体数で100羽以上いた25回の調査で、各区分域に全体の何%いたか、その回数を示したのが図8である。(A)・(B)・(E)の各区分域が比較的多く利用されており、(C)・(D)の利用度は落ちることが窺われる。湖面にいる水鳥の数がきわめて多い時は、水面全体に広がって分布している。また北西の季節風が強い時など、数が多くなければ強風を避けるように、(A)・(B)・(C)・(D)の縁や入江の方に寄っているのが観察された。

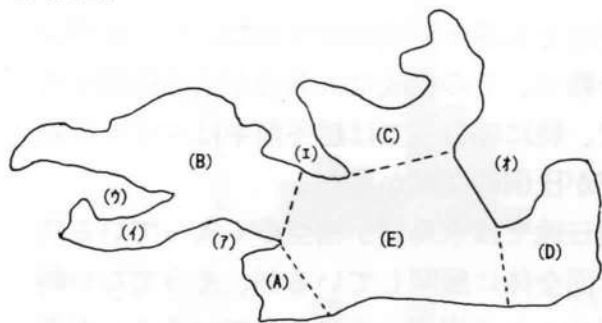


図7. 朝日池における水鳥類の分布を調べるための便宜的区分

4. 考 察

朝日池は鳥獣保護区(誘致地区)、鶴ノ池は猟区となっているため、両池の越冬中の水鳥類の個体数には大きな差がある。朝日池では県内にある他の保護区の湖沼と同様に、ガンカモ類を主とする水鳥類が越冬する。ただし、水面が全面凍結したり、降雪量が多く水面が閉ざされると、ガン類の一部を除き滞在しなくなる。鶴ノ池では狩猟期間中(11/15~2/15)時折ガン類が入る他は殆ど水鳥類の姿が見えないのは、一般猟野の湖沼・河川と同じであるが、狩猟期間外でも種数・個体数とも朝日池より少ないのは、他の要因にもよるかも知れない。また、この池が保護区となった場合は、水鳥類の生息渡来がどのようになるか、興味の持たれるところである。

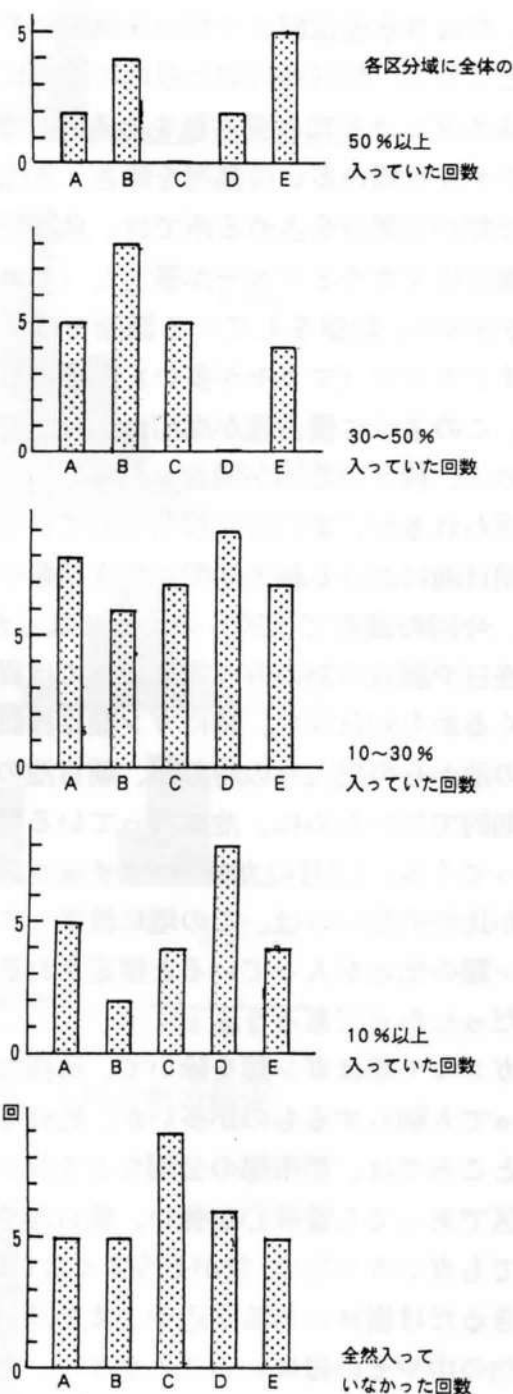


図8. 朝日池の越冬期における各区分域の利用分布状況(調査回数25回)

朝日池で越冬するガンカモ類の中で、水面採餌カモ類が70%以上の大部分を占めるが、その中でもマガモが突出して多い。2月頃からマガモの優占率が下がるのは、調査日に因るかも知れないが、暖冬のため北帰が早まり、マガモより北帰が遅いコガモが多く残っていたためとも思われる。水面採餌カモ類は湖沼

の生産力に関係せずに生息するといわれるが、近くにある中栄養湖の頸城大池・小池でも、やはり水面採餌カモ類が圧倒的に多い。

ところで、朝日池に似た県内の湖沼における越冬ガンカモ類の優占種をみると、ガン・ハクチョウ類の多い福島潟を除き、水面採餌カモ類が大部分を占める所では、鳥屋野潟と佐潟ではマガモとコガモが優占し（マガモの方が多）、給餌をしている瓢湖ではマガモとオナガガモ（マガモが多い）が優占している。このように優占種が湖沼によって若干違うのは、種々の要因が関連しあっているものと思われるが、まだよく解明されていない。

朝日池における越冬期間中の水鳥類の割合は、今回の調査では図6のようになったが、調査日や調査時刻の取り方によっては異なってくるかも知れない。特にガン類は採餌のための池からの出入りの時刻が、朝日池の場合規則的でないために、池に入っている数も変わってくる。12月のガン・ハクチョウ類の割合が比較的高いのは、この地に渡来していたガン類の殆どが入っていると推定される調査日だったからであろう。

ガンカモ類はガン類を除いて、給餌などによって人馴れするものが多いが、給餌をしないところでは、都市部の公園などを除いて保護区であっても警戒心が強い。朝日池や鶴ノ池でもガンカモ類は、数がそう多くない時は、できるだけ樹林のある岸辺や、丈の高い抽水植物の中やその縁にすることが多い。それらの樹林や高い抽水植物は水鳥類にとって安心できる環境となっているようである。しかし、その付近に近づくものなら、相当遠くからでも察知して、たちまち一斉に飛び立ってしまう。朝日池で(A)・(B)・(E)の区分域が比較的によく利用されているようであるが(図7)、これらについては更によく調べる必要があると思われる。

なお、この調査期間の冬のシーズン中は暖冬少雪で、湖面が凍結または降雪によって閉

ざされていた日は少なかった。平年の気候状況では水鳥類がどのような状態になるか、今後の調査にまちたい。

ま と め

朝日池と鶴ノ池の水鳥類について、主に1992年に調査したところ、8科48種を確認した。個体数についてみると、保護区の朝日池ではガンカモ類の越冬中最高1万羽以上を記録したが、鶴ノ池では猟区のため、狩猟期間中滞在する水鳥類は殆ど見当たらず、狩猟期間前の10月に最高1800羽程度を数えたにすぎなかった。

両池とも越冬期間中の水鳥類の殆どはガンカモ類で、その構成は大部分が水面採餌カモ類で、特に朝日池では越冬前半はマガモの優占率が圧倒的に高かった。

朝日池では水鳥類が相当多く入っている時は水面全体に展開しているが、そうでない時は樹林のある岸辺の方に寄っていることが多く、樹林が安心感を与える重要な環境因子となっているものと考えられた。

朝日池は鶴ノ池と共に、天然記念物で希少種マガン・ヒシクイの越冬・中継の拠点として重要な池で、特にマガンにとっては県内最大の越冬・中継地点である。こうしたことから、この池の環境保護が強く望まれている。

参考文献（主なもの）

- ・新潟県環境保険部1989:湖沼自然環境実態調査報告書
- ・羽田健三1986:鳥類の生活史、築地書館
- ・渡辺 央1980:信濃川大河津分水路域にけるガンカモ科鳥類個体群の季節的変動、長岡市立科学博物館研究報告第15号
- ・帆刈信夫1982:佐潟の陸水環境と水禽類、新潟県生物教育研究会誌 第17号
- ・山田 清他1985:鳥屋野潟の水禽類、新潟県生物教育研究会誌 20号
- ・新潟県1993:新潟県に飛来するヒシクイとその越冬生活、鳥獣保護対策調査報告書Ⅰ
- ・新潟県1993:鳥獣保護対策調査報告書Ⅱ（ガンカモ科鳥類の生息状況調査）

猛禽に魅せられた男

塩沢町 木下 弘

*S61年1月、尾根の1000mほどを巡回するイヌワシを発見する。

*S61年4月、K谷の壁を登ってみる。岩壁の700mほど手前になると、ガケの中腹から1羽のイヌワシが舞い上がって、巡回しながら1300mほどまでのぼり山頂の岩にとまる。さらに100mほどすすむと反対岸の尾根からオスと思われるイヌワシが頭上を飛び越していく。巣があるに間違いない。

*それから岩壁の真下に行く。頭上の高さ60mほどの岩棚に大きな巣を発見。巣の中が見える対岸の急斜面をよじ登る。

*登る途中で、どこからともなく頭上30mほどの上空に、2mもある大きなイヌワシが現れ、岩壁の巣をかすめて飛び去る。

*やっと巣内が見渡せる高さまで登り詰める。直径2mほどの巣の中には、真白いハトほどのイヌワシのヒナがいる。巣内には、スギとゴヨウマツの青葉がしいてある、15分ほどして、親ワシがノウサギの足をぶら下げて飛んで来るが、そのままどこかに消える。

*まだ4月で雪が2mもあり、ヒナが凍えることを心配して山を下りる。巣から1kmほど下がると親ワシ急降下して巣に入る。

この文と絵は、私が20年前に六日町中学校に勤めていた頃に六中1年生だった阿部孝君が、最近のイヌワシ調査をまとめた記録の一部である。昨年の秋、県支部研究発表会の前に発表者の小島幸彦氏へ送った孝君がこれまでに調べてきたイヌワシに関する情報だった。

研究会の折に、小島氏とも合う予定になっていたのであるが…。

現在、県内でもイヌワシにのめり込んでい

身でタカやイヌワシに情熱を注ぎこんだ近頃としては珍しい貴重な経験の持ち主の若い頃の活躍を紹介したい。

彼は、幼い頃から、六日町近くの山々を、かつて熊狩りをしていた父親に連れられて山歩きをしていた。だから、少年にとっては、魚沼の山々は自分の庭のようなもので、そこに生きるワシタカは遊び友達だった。

少年は、山形県最上川の流域深山に伝承されてきた鷹狩りの鷹匠沓沢さんの弟子になることが夢だった。彼の生徒手帳には、鷹匠の新聞切り抜きを大切にはさんであつた。

私が彼とワシタカ観察に同行したのは、彼が中1の春に西山のノスリの巣を教えてくれた時とその夏休みに、清津峡の鹿飛橋のブナ林にテントをはって露営した時である。いま考えると、とても無茶なことをしたと思うが、中学1年生だった彼から教えてもらったことはドッサリだった。昼間は多少の登山客が訪れても、夜は清津峡の全く人気のない暗黒の世界でわたしと中学生2人だけ、テントの中での話しがはずむ。彼が熊狩りに同行した時の話、ノスリ、サシバ、イヌワシの生態についての話、いつの間にかシートンの動物記や戸川幸夫のまたぎの世界に誘い込まれていたのである。

彼は、急峻な崖を身軽によじ登ったり下ったり、素早いことカモシカの如くだった。また、空高く飛翔している猛禽の姿を見つけることのうまさについては、信じられないほどの視力なのである。双眼鏡でやっと視野に探し出すようなものを、肉眼で種類まで言い当てるのだ。

分からないことは、積極的に誰にでも尋ねたり、文献を集めて自分の観察したことと比



べて違いがあれば、納得するまで追究した。
例えば猛禽の権威、県傷病センターの風間さん
にすぐ連絡していろいろな指導を受けていた。

“サシバの観察”をアニマ賞に応募して最優秀
賞となったが、文章、絵、写真等全部自分の
足でかせぎ、構想を練ってまとめたのも中
学生一人の力だった。

社会人になってからのことは、断片的に聞
くことだけだったので詳しいことは分からな
いが、猛禽への情熱は少年時代以上だったよ
うだ。

イヌワシ、クマタカを追い求めて何日もの
時間をかけて群馬県境の山々まで精力的に入
って観察し、沢や尾根筋の名前が詳細に観察
ノートに記録されていた。観察したことは、
日記として大学ノート何冊かにイラスト入り
で克明に記録されていた。これらの記録に
は、細やかな孝君の猛禽への愛情と保護への

願いがこめられていた。

それらの記録は、南魚の山々を知り尽くし
こよなく自然を愛した孝君から野鳥を愛する
仲間へのメッセージに思えてならない。

少年時代の孝君を知る者の一人として、こ
の支部報の欄をかりて猛禽に魅せられた一人
の青年を紹介させてもらった。

南魚は勿論、新潟県、全国の猛禽研究者に
とって、これからさらに有望であった青年を
亡くしてしまい本当に残念でならない。

この記録ノートをもっと多くの仲間を紹介
して、猛禽保護に役立つように働きかけるこ
とができれば、最も喜んでくれることと信じ
ている。孝君の冥福を祈ります。

私はこの夏、8月26日に数年ぶりで巻機山
登山したが、牛ヶ岳山頂を3羽のイヌワシが
勇壮に旋回している姿を初めて遠望した。こ
のワシ家族がK谷で繁殖したワシに思えてな
らない。

春の総会・研修会・探鳥会に参加して

新潟市 一戸 千華子

6月11日、北魚沼郡入広瀬村で県支部春の総会・研修会・探鳥会が開催されました。昨秋に野鳥の会に入会したばかりの初心者ですが、すっかり鳥のとりこになってしまい、この総会は大変楽しみにしていました。総会は入広瀬村の浅草岳山麓にある「サン・グリーンパーク」にて行われました。受付時刻をはるかに遅れて入ると（実は総会の前に戸隠まで鳥見に行ってきたのでした）、ちょうど皆さん御食事中、知らない方々と初めて御一緒する訳ですから少し緊張していたのですが、中ではビールも入りなごやかな雰囲気。よく見ると探鳥会で何度かお会いしているお顔も多く、お話しているうちにすっかり緊張は和らぎました。夕食後、総会では平成5年度事業報告・会計報告の承認、平成6年度事業計画・会計計画の審議、その他年会費変更の必要や、20周年記念事業の実施等について熱心なディスカッションが行われました。会費については、一人年額千五百円から二千円に変更する事が承認され、また20周年記念事業として、記念誌（県内鳥類目録と探鳥地案内）の発行等が検討されました。続いて行われた研修会では、柳瀬昭彦先生より、翌朝の探鳥地田代平周辺のブナ林・山野草等をスライドを見ながらわかりやすくお話して頂きました。次に末崎朗氏より、93年秋期・新潟県内のワシタカ類の渡りについてのお話があり、こちらも貴重なスライドを見ながら識別ポイント等について詳しくお話して頂きました。総会・研修会とも、大変興味深く聞かせて頂きました。更にその後、懇親会が開かれたのですが、鳥の話を酒の肴に、夜更けまで大いに盛り上がったのでした。さて、翌朝は5時起床、宿舎前に5時半集合で

す。昨晚の疲れはどこへやら、期待にはやる心で目が覚めました。まず宿舎前で全員で記念撮影後、それぞれ車に分乗し、田代平を目指しました。途中、山菜取りの入山者の羨望のまなざしを尻目に、農林省（？）管轄の林道ゲートの鍵を開けて私たちの車は更に奥へ奥へと進みます。目的地少し手前のやや開けた林道で車を降りると林道わきの繁みからはやくも小鳥たちのさえずりが迎えてくれました。さわやかな朝の山の空気を感じながら聴く優しい歌声に、心が洗われるようです。探鳥コースは田代平へは降りずに、まず八十里越え旧道を歩いて小松峰へ向かいました。まだところどころ残雪が多く、厚い雪溪の上を恐る恐る渡った箇所もありました。野鳥の会の皆さんの中では年齢が若い方ですので山歩きは有利かと思いましたが、どうしてどうして、ベテランの高年齢？（失礼）の方々の健脚には遠く及びませんでした。コースの途中、何種類もの鳥達のさえずりが聴こえるのに木々の葉がおい繁り、姿が見えないことが多かったのですが、オオルリがソングポストに止まり、その美しい、宝石のようなルリ色の姿を見せてくれた時は心が躍りました。また、まだ一度も姿を見たことのなかったカッコウを、遥か向こうの尾根の木の梢に発見出来た時は大変興奮し、本当にあの変なポーズで止まる姿が図鑑通りなのには驚きました。小松峰では、素晴らしい景色を眺めながらの朝食となりました。ジュウイチがすぐそばまで接近してくれたようですが、必死に姿を探す人間達をからかいにでも来たのでしょうか？小松峰からの眺望は素晴らしく、大物のワシタカが今にも山際から青空へ舞い上がりそう(?)な気がしましたが、舞ったのはトビ

ばかりでした。ここまでに林道わきには沢山の山野草が可憐な花を咲かせていましたが、確か小松峰にはその名も香わしいヒメサユリという花が、たった一輪ひっそりと咲いていました。名の通り、匂いたつような気高さ、美しさでした。残念な事に、帰りに通った時には、心ない人に持ち去られていましたが・・・野鳥も野草も、自然の中だからこそ美しいのに、そう思うと無残に引き抜かれた跡

類は見れませんでした。山を歩きそのさえずりを聴くだけでとても心安らぎ、満ちたりた豊かな気持ちになりました。くだらない質問をしても、うるさがらず丁寧に説明して下さい、他にも花や木や昆虫など実にさまざまな分野まで教えて下さった沢山のベテランの方々に大変感謝しています。

野鳥を見るようになってから、その美しさ愛らしさに魅了されるのは勿論ですが、小さな



サン・グリーンパーク前にて

が痛々しく、絶対こんな事はすまいと思いました。更に鞍掛峠までのやや暗い低木林からはクロジ、ミソサザイ、コルリ等の高らかなさいずりが響きわたり、しばしその美声に酔いしれました。帰りのコースで田代平湿原へ足をのばし、そこで鳥合わせを行い30種を越す野鳥を観察出来た事を確認しました。森の母なるブナ林の恵みの中、姿こそ沢山の種

体を震わせて懸命に歌い、必死に生きている彼らの姿に感動させられます。環境破壊が進む昨今ですが、彼らに何の断りもなく住む処をおびやかす権利が人間にあるのだろうかと考えようになりました。鳥たちの住める自然が少しでも多く残るように、ささいな事からでも協力していければと思います。

第15回評議委員会・支部代表者会議報告 第2回中部地区ブロック会議報告

事務局 桑原 哲哉

●評議委員会・支部代表者会議（於 東京都 渋谷区子供の城 94. 2月19日～20日）

今年の2月に東京で第15回日本野鳥の会評議委員会、および支部代表者会議が開催され、県支部からは石部、本間、桑原の3名が参加しました。拡大評議委員会の全体討議や分科会の様子も含めて簡単に会員の皆さんに報告したいと思います。

第一部の評議委員会は第24期の事業報告（H5.4.1～H6.3.31）がありました。年度のまとめとして、以下のことが報告されました。

平成5年度は環境基本法の成立や、地球環境基金などが設置され、国や民間団体の環境への取り組みが活発になった年度であった。その中で本会は3年間取り組む「湿地とそこにすむ野鳥たちを守る」活動の2年目として集中して取り組んだ。また、第24期の事業報告では湿地の取り組み3年目として調査をまとめ、要望、提言を進める。60周年を期に普及を進めるという内容でした。予算、決算については数字が膨大のため省略します。全
本討議の中では、支部運営のあり方として本部と支部のつながり、流れを大切に要望がありました。また取り組むべき保護問題としては、本部の方針としては具体的な活動計画、(アクションプラン)を立てて保護活動を進める提案がありました。

分科会では県支部は3名参加したので、石部が第1分科会「自然保護」の司会として、本間が第3分科会の「普及・会員増」へ桑原が第4分科会の「組織。支部活動情報交換」にそれぞれ参加しました。第4分科会では、地域の支部活動の推進のためのプロの必要性和育成、支部間のつながり、調査員、指導員の資格制度などの提案がありました。会員の人数

や規模によって支部運営の形を検討していく
必要があり、会員500人を境に500単位で支部の規模が変わっていくようでした。また、夜の懇親会では各県自慢のつまみや酒も披露され、全国の鳥仲間と交流を深めました。オークションでは県支部出品の鳥の絵も少額ながら売れ、少なからず出水のツルの越冬地基金となりました。ハードなスケジュールでしたが、本部や各県の役員と情報交換もでき、有意義な2日間を過ごすことができました。

●第2回 中部地区ブロック会議（於 静岡 県富士山麓朝霧高原 6月25日～26日）

県支部の総会が終わって間もなく昨年に続き第2回中部地区ブロック会議が静岡県で開催されました。中部8県12支部47名の参加がありました。各支部の提案では密猟問題について（岐阜、愛知）、中部ブロックリーダー研修会の実施（石川、甲府）、会員増に対する支部の対応（遠江）、ブロック内探鳥地の情報交換（福井）、支部活動の組織化（新潟）等がありました。

その中でリーダー研修には本部も要請次第で対応するとの返答があり、次回の担当支部についても愛知県支部が快諾しました。

夜の懇親会では各支部の国自慢のお土産の紹介があり、珍鳥のVTR、スライド上映がありました。また、翌日の早朝探鳥会で富士山麓の鳥達を観察し、新潟では珍しいノビタキの巣立ち雛の姿を見ることができました。帰りの新幹線で、本部の塚本専務理事と充実した2日間の思い出を語り、帰路につきました。

新 入 会 員 紹 介

(1994年2月10日以降9月22日現在)

氏名	住所
飯塚幸太郎	上越市稲田3-1-22
高鳥 正一	西頸城郡能生町大字能生 2066-9
入沢三津子	三条市石上3-7-15
高橋 孝夫	東頸城郡大島村大字大平 3676-1
橘 由紀夫	新潟市坂井東6-12-40
片山 富夫	三条市塚野目725-7
長谷川利二	南蒲原郡栄町新堀2212-1
小熊 龍司	北蒲原郡黒川村東牧724-108
秋山 直子	新津市北上2-21-32
渡辺 政和	北蒲原郡水原町緑町1-46
武田 隆一	東頸城郡大島村大字大平 3833-1
清水 保子	村上市二之町12-47
二宮 信男	十日町市土市1360-2 根津アパート2号室
鷺尾 修一	新潟市坂井東3-13-25
波多野勝久	柏崎市宮場町12-16-205
富沢 哲志	埼玉県浦和市大谷口3177-6
中村 庸一	糸魚川市横町1-5-10
笠原 勇一	西頸城郡能生町大字大沢 556-39
正木 和行	中魚沼郡津南町大字 下船渡戊282東京電力津南寮209
大石ヨシエ	新潟市太夫浜1684-6
渡辺 晃	白根市鷲ノ木新田630

大矢 孝子	新潟市小針1-19-7 コーポ浅草202
伊藤 達司	豊栄市早通南2-7-4
安宅 敏栄	北蒲原郡中条町星の宮町12-8
三浦 明	新潟市栗山4-4-24
小池 抱一	新潟市五十嵐西32-30
佐藤 恒男	新発田市緑町1-1-7
勝俣 将明	燕市三王渕286-3
勝見 雪子	新潟市堀之内南1-29-3
加藤 吉彦	五泉市伊勢の川8-7-14
西津 政信	長岡市宮原2-8-26
成瀬 雅彦	上越市佐内町5-40-404
岩崎 康一	新潟市小針4-12-5

編 集 後 記

このまま永遠に夏が続くんじゃないかと思うほど暑かった夏も、9月の声を聞くと少しずつ涼しくなり、いつのまにかシギ、チドリ、さらにはガンカモ渡来の便りが聞こえるようになりました。鳥を通して秋を感じることでできる幸せを今年は特にしみじみとかみしめています。会員の皆さんはどんな夏だったのでしょうか。ところで支部報編集部では、皆さんの原稿、ご意見をお待ちしています。ぜひお便りを下記までお寄せ下さい。(末崎)

〒943 上越市南城町2-6-10コーポ蓮池105号

末 崎 朗

(TEL0255-26-9963)

発 行	1994年10月10日	No.38
発 行 人	大 島 基	編 集 者 小林成光, 末崎 朗
	日 本 野 鳥 の 会 新 潟 支 部	
事 務 局	〒951 新潟市東中通1番町86番地28	
	☎025-229-2018	本間由紀子方 <振替>新潟1-6002